

第二話 ^{らんえ} 爛壊



—— その **目** で見届けろ ——

※留意点

第一話～第三話までの間、探索者がロストすることはない。

この話数の間はヴェルゼが形成した仮想空間の中で展開されているためである。

万が一以下のような状態になった場合は特殊処理を行う。

▶HP が 0 以下になり、なおかつ蘇生に失敗した。

死亡判定が入った場合、即座に HP を全回復させ起き上がらせる。

ただし最終話での判定にマイナスが入るため描写などでそれとなく無暗に死ぬことがないように伝えること。

【描写例】

あなたはたしかに息絶えた。

視界が黒く染まり、意識が途絶えようとしていた……その時だった。

貴方の体はまるで時間が巻き戻るように再構築されていく。飛び散った肉が、臓物が、逆再生した映像のようにあなたの体のもとへと戻っていく。気が付けばあなたは平然と起き上がり、当たり前のように心臓は拍動を始める。

なのにどうしてだろう、この嫌悪感と違和感は。〈SANC 1/1D6〉

▶SAN 値が 0 以下になってしまった、SAN 値が吹っ飛んでしまった場合。

即座に SAN 値を SAN 値が 0 になってしまった SANC 判定を行う前の SAN 値まで戻す。ただし最終話での判定にマイナスが入るため描写などでそれとなく無暗に死ぬことがないように伝えること。

【描写例】

あなたの正気は目の前の異常になすすべなく散り散りとなり、ぶつんと糸が切れるようにしてあなたの正常な思考を止めてしまった。今のあなたは息をして生命活動を維持するのみの肉塊に過ぎない。そのはずだった。暗黒色に染まったあなたの濁った眼に光が戻る。あなたの目は再び世界を視認する。なのにどうしてだろう、拭いきれない違和感と嫌悪感があなたの中に渦巻き続けているのは。〈SANC 1/1D6〉

※シナリオの読み方

◇ …… 技能ロール

■ …… 公開情報

◆ …… 秘匿情報(HO 専用情報)

★ …… クリアに必要な情報(KP 側からなるべく提示すること)

▼ …… イベント/区切り

{ } …… 名称変更可能箇所(新 CCFOLIA での使用を想定)

■ KP 情報については右の灰色枠の中に記す

シナリオ本編

序(マスターシーン)

ぺらり。ぺらり。本を捲^{めく}る。

かくして、不思議な義眼を持つ{HO1}と、記憶を失った{HO2}は出会った。

行動を共にすることとなった二人と{HO1}の相棒と名乗るヴェルゼは、アルバの持ちかけた「黄金の指環」。そして、ライン川周辺で起こっている不可思議な事件の解決に臨^{のぞ}む。

そこで、なぜか二人を知っている様子の青年。

さらには、カエルの怪物との邂逅^{かいこう}を果たした。

次々に奇妙な事件に巻き込まれながらも、二人は自らの内にある長年抱え続けてきた疑問、あるいは、失った記憶に対峙していくことになる。

バイロイト音楽祭で見た映像の中で、エルダと{HO2}、そして{HO1}によく似た少女が共にいたのはなぜなのか。

{HO2}は一体何者で、どうしてシュヴァルツヴァルトの森に倒れていたのか。

不可思議な縁で繋がれた二人の物語は まだ、始まったばかり。

■ マスターシーン

基本的に PL・PC の RP は入らない。このシーンは PL に向けて語り掛けている。

COCシナリオ 爛壊

第二話「爛壊 - らんえ - 」

夢 HO1 (マスターシーン)

{HO2}との出会い、そしてライン川での騒動等から数日経ったある日。

あなたは夢を見る。

ごうごうという風の音が聞こえる。

視界はぼやけ、周囲には黒々とした瘴気のようなものが漂っていた。

その瘴気しょうきのなかに、1つの奇妙な非対称の建造物のシルエットが浮かび上がる。

それは1つの非常に突出した側面を持つピラミッドのように見えた。ピラミッド型の建造物の入り口に向かって7つのオベリスクが並んでおり、内部が見えるように一部が開いている。

その最奥には石の祭壇を備えた長いホールが設置されている。

周囲には12センチ程度のハゲタカめいた石像が計5つ設置されており、それぞれ規則正しく祭壇を囲うように鎮座していた。

その場にただで肌を突き刺すような重圧感に襲われる。

石像から？ピラミッドから？

否、更にもっと奥まった場所にある、まだ目に見えていないとてつもなく強大なものが息をひそめているのだと、あなたはなんとなく理解できた。

あなたの足はふらふらとそちらに向かう。

あなたはこの場所を見たこともないはずなのに、どうしてだか“知っている”ような気がした。胸が妙にざわめく、まるでここに来ることをずっと望んでいたかのように。

刹那、手首を掴まれた。

「行かないでくれ、行くな、リン……！」

そこに居たのは、バイロイト音楽祭で見たエルダだった。

悲痛な叫び声をあげながら、あなたの体に縋り付く。

■ 悪夢

フライハウスガルテン、暗き丘「デュンケルヒューゲル」の光景である。また、これはエルダの記憶の中にあるリンが犠牲になった際の再現だ。

しかしその瞬間、エルダは一瞬背後からの衝撃に崩れ、血を吐いて倒れる。
背中が大きく切り裂かれ血が溢れる。

エルダが居た場所には、あの川で見た不気味なカエルの異形が居た。
ゲエゲエと不快な声をあげ、まるで喜んでいるかのように、笑っているかのよ
うに、崩れたエルダの体を更に切り刻んだ。

ふと、前を見やる。
いつの間にかあなたの周囲は大勢の黒ずくめの人間に囲まれていた。

「さあ、封印を解くのだ」
「お前の真の目的を果たせ」
「神々の黄昏を今ここに」
「主なる神の目を呼び覚ますのだ」

黒ずくめの人間たちの声が反響し 次第に意識が朦朧^{もうろう}としていく。
刹那、あなたの目は背後から何者かによって覆い隠される。
一瞬驚き身を竦ませるあなたに、背後の人物は優しく語り掛ける。

「抗え、負けるな、恐れるな」
「私たちの愛しい子。私たちはいつでもお前と共にある」

しわがれた、老婆の声だった。しかしどこか芯の通った、凜とした声だった。
ひどく懐かしい声だった。勿論聞いた覚えなどどこにもない。誰かもわからない。
それでもあなたの心は安らぎで満たされる。

……覆い隠された目に、光が差す。否、あなたの目は開かれた。

目が覚める。自室のベッドの上、あなたは全身ぐっしょりと汗で濡れていた。
生ぬるい不快感を伴った目覚めに内心悪態をつきながら。
さあ、今日も一日が始まる。

夢 HO2(マスターシーン)

{HO1}との出会い、そしてライン川での騒動等から数日経ったある日。

あなたは夢を見る。

……星が流れる夢を見た。

星、だと思ったそれは、あなたの体からまるで孢子のように飛ぶ光の粒子だった。粒子はあなたの体からぼろぼろと零れて、暗闇の中にまき散らされていく。散らされた光の粒は次々に星に着地したかと思えば、様々な生命を芽吹かせた。

あなたの体は今、ひび割れた赤さび色の巨大な星となっている。

体表……^{ちかく}地殻の割れた隙間には海にも似た深い青がゆらめいていて、体内で絶えずこぼりこぼりとあぶくを立てた。〈SANC 1/1D10〉

星々を横目にあなたは暗闇を滑るように走る。

光の粒子が飛ぶたび、あなたは自分の体が少しずつ溶かされていくような感覚に襲われた。あなたは理解する。あなたの命そのものを、この広大な宇宙に振りまいているのだと。

「たんぽぽ計画だって うまいこというよね」

「さあ、彗星さん。もうすぐ僕の生命維持装置は停止する。その前に僕の話を少し聞いてほしい」

ヴェルゼの声だった。声がしたほうを探す。

あなたは巨大な体のあちこちにある裂け目の海の中に目を形成し、彼の姿を探すだろう。そうして内側の、深い海の中に目を向けた。

そこには、あなたの体内に沈む宇宙船のようなものがある。その内部にある運転席らしき場所に、頭から血を流しながら脱力した様子で座っているヴェルゼの姿を見つけた。

「もうじき生命維持装置が止まる。僕は死ぬだろう」

「その前に、歌を歌ってほしい。君の声の周波数は、僕の耳では上手く聞き取れないけれど」

「……一人は寂しい 一人で死ぬのは、嫌、なんだ」



■ スチル

個別導入 HO2(ヴェルゼ)

あなたは「自分と同じだ」と思った。

だから、あなたは彼に声を届けるために、彼に届く声を作るためにかたちを変えた。頭を、手を、足をつくる。歌うための口を、彼と同じふたつの目と耳、鼻をひとつ。真似をする。

……海の中にぽつんと生まれたのは、あの日音楽祭で見たエルダと{HO2}、あなただ。そうしてあなたは生まれた。あなたはあなたになった。あなただった星のようななにかの中で切り離されて、あなたはたった一人になった。

こぼり、口からあぶくがはぜた。

……そこで、夢は終わる。

あなたは直感的に、これが過去の、あなたの失われた記憶の断片なのだと理解する。〈SANC 1/1D3〉

体はまるで海から引き揚げられたかのようにぐっしょりと汗をかいていて、不快感に顔をしかめてしまいそうになる。

とにかくにも、朝がくる。一日が始まる。

寝台から身を起こし、朝支度を始めなければ。

◆HO2 HO 更新

▽HO 追加情報：懷疑^{かいぎ}のブリュンヒルデ

あなたは恐らく、宇宙を旅する巨大な星から分離した、小さな星だった。そこからどうしてかヴェルゼによく似た人物と接触し、今の形になったのだ。夢の内容が断片的すぎて今の状態では何が何だか分からない。

もう少し記憶を辿る必要があるが、{HO1}と共にいればなにかわかるのではないかと。と思うだろう。

▽HO2 の追加目的

- ・ HO1 に同行し、自らの記憶を辿る。

共通導入

夢見のあまりよくなかった探索者達だったが、朝ごはんを食べようとキッチンに向かおうとしたとき、異変に気付く。

〈聞き耳〉

成功：なんだかキッチンのほうが焦げ臭いと思う。

失敗：なんだかキッチンのほうから変なにおいがするような……？

まさか、とキッチンの方へと向かえばそこには――。

「あはは……やっちゃった……」

キッチンには黒く焦げつく目玉焼きが乗ったフライパンを片手にしょげているヴェルゼと、やれやれといった様子で肩をすくめているアルバの姿があった。

探索者達に気づいたアルバはことの顛末^{てんまつ}を告げる。

「君たちのために朝ごはんを作ろうと思ったんだって」

「でもまさか、目玉焼きすら作れないとはね……」

「ただ、頑張っていたから、少しでいいから食べてあげてくれないかな」

食卓に並んだのはこげた目玉焼きと、これまた盛大に焦げ目のついたトースト。カリカリになりすぎたベーコン。ヴェルゼは少しもじもじとした様子でこちらの様子をうかがっているだろう。

「皆で一緒にご飯を食べてすごうれしかったから、じゃあ僕が作ったごはんを食べて貰ったらもっと嬉しいんじゃないかって思ったけど」

「どうかな おいしいかな……」

実際食べてみるのであれば見た目ほどまずくはない。正直に感想を言おうがお世辞を言おうが、どちらにせよヴェルゼは嬉しそうにするだろう。

そんな賑やかな食事が終わり、アルバが淹れてくれたコーヒーを飲みながらゆっくりとした時間を過ごす。その中で。アルバが口を開く。

「さて、仕事続きで申し訳ないんだけど。今日も仕事を頼まれてくれるかな？」
「今日依頼したいのはこれ。鏡の修復と、本の修繕」

そして、それぞれの品について説明してくれるだろう。

■アルバからの依頼品

・ 鏡

ローア・アム・マインの町に住む老婆の所有物。
とある博物館の展覧会に出品しようと思っているとのこと。
所有者曰く「魔法の鏡」。時折変なものが映りこむとのことだった。

・ 本

依頼主はアルバ。
金髪の青年の荷物の中にあった古めかしい本。負傷した時に一緒に一部が破れてしまったようだ。
ドイツ語で書かれており、タイトルは「呪われし者たちより」と書かれている。

・ 本についてアルバに尋ねる

「なんだか大事そうなものだったしちょっと直しておいてあげてほしいんだ」
「彼が起きるまでに何食わぬ顔で戻しておくから。……まあ、善意半分、興味半分ってとこかな。ほら、なんだかおもしろそうな雰囲気の本じゃない？」

■ 金髪の青年(ハーゲン)

彼はまだ起きていない。アルバが介抱しているため、飲まず食わずではあるものの健康面に特段問題はなさそうである。

仕事パート

■修復・修繕について

今回から HO2 も仕事を手伝うことが出来る。

鑑定の時と同じように指定された技能判定を順に行っていき、どちらかひとりが技能に成功すれば成功扱いとなる。

ただし、修復・修繕に時間が掛かる物品も、関連する知識を得ることで正しく修復・修繕を行うことが出来る品もあるだろう。

基準は物品により異なるため、都度提示する。

また、技能の成功はシナリオクリアに必須ではないが、生還報酬に影響する。

■ 修復と修繕の違い

修復=破損個所や不具合を以前と同じ状態に戻すこと。

修繕=傷んだり壊れたりした個所を繕い直すこと。

■鏡

依頼者：ローア・アム・マインの街在住の老婆

古風なデザインの楕円形の青銅の鏡だ。

鏡前側の天地にはそれぞれ動物の牙と開いた顎^{あご}のバロック様式の浅浮彫^{あさうきぼ}りがある。左右の両側の中ほどの開いた口の隅を飾るように曲げられた文字が書かれているが、何と書かれているかはわからない。若干鏡面がひび割れており、全体が濁ったように曇っているため、研磨する必要があるだろう。

■判定技能

①〈製作：古美術修復〉〈修復に使えるような技能〉〈DEX×5〉など

■ 依頼品の鏡

「致死のガラス」の複製品である
【キーパーコンパニオン/P56】

■鏡修復・結果

①〈製作：古美術修復〉〈修復に使えるような技能〉〈DEX×5〉

成功：鏡面を磨いていく。すると段々と元の輝きを取り戻し、自分の顔が映るようになるだろう。

失敗：鏡面を磨いていく。繊細な作業の為手間取ったが、曇りは取れるだろう。

◆HO1のみ個別情報

不意に、鏡に大きな目が映りこむ。大きな緑がかった青い目がぎょろりこちらを見た、ような気がした。〈SANC 1/1D3〉

◆HO2のみ個別情報

不意に、鏡に大きな目が映りこむ。赤さび色の目がこちらを見つめていた、ような気がした。〈SANC 1/1D3〉

■ 鏡の中の怪物

探索者達は一瞬鏡と同調し、
HO1はシアエガ
HO2はグロースの姿を見た。

■本

表紙と中身のページが裂かれたように破れている。

読めないことはないかもしれないが、元々難解なドイツ語で書かれているため読みにくさが増している。

また、本の隙間に【写真】のようなものが挟まっていた。この時代に似つかわしくないモノクロ写真で、元の所有者が挟んだままだったのだろうと思われる。

■判定技能

- ①〈製作：古書修復〉〈修繕に使える技能〉〈DEX×5〉など
- ②〈図書館〉〈歴史〉

■本・修繕一回目結果

- ①〈製作：古書修復〉〈修繕に使える技能〉〈DEX×5〉など

なんとか時間をかければ修繕は可能だろうと思われた。幸い、破損しているページの数はそう多くはない。鏡の配達の際に修復を行っていけば読める程度には戻せるだろうと思う。現時点では深い内容までは読めない。

※ここで技能判定に失敗した場合は夜パートの解説に若干のマイナス補正がかかる。KP はメモをしておくとい。

- ②〈図書館〉〈歴史〉

「呪われし者たちより」は出版時に省略された題名のように、正式名称は「呪われし者たちより、もしくは古き恐ろしきカルトに関する論文」のようだ。

1930 年までドイツの図書館に収蔵されていたようだが、管理番号の印などが削り取られており、何者かに奪取されたのだろうと推測できる。

■写真

日焼けしており鮮明ではない。

複数枚あり、それぞれ風景写真と複数の人物がうつった写真だ。無骨な建物と、病室のような部屋。手術着のようなものを着た人間。

そこに、{HO2}とエルダ、そして{HO1}にそっくりな少女が写っていた。

写真の彼女らは目を伏せ、いずれもつらそうな顔をしている。〈SANC 1/1D3〉

〈アイデア〉

音楽祭の直後に見た光景とそっくりだと思う。

◆HO1のみ 〈アイデア〉

かなり前の写真のようだ。自分であるわけではない。とすればこの写真にうつっているリンと呼ばれていた自分そっくりの少女は一体何者なのだろうか。

◆HO2のみ 〈アイデア〉

この写真はかなり前のもののように思う。つまりエルダと自分は数十年も全く容姿が変わっていないことになる。また、この写真を見た時、懐かしさで胸が苦しくなるような感覚があった。

{HO1}にそっくりな少女、一体この人物は何者なのだろうか。

また、そんな写真の中に一枚だけ雰囲気の違うものが紛れていた。

モノクロではあるが比較的新しい写真だ。どこかの町の写真のようで、高いところから町の全景を撮っており、町全体はきれいな丸い形をしている。

★〈知識〉 〈アイデア〉

成功：ネルトリンゲンの町では？と思う。

確か、隕石が落ちてできたクレーターに作られた街、だった筈だ。

街自体有名ではあるが、探索者達はなぜか懐かしいような感覚に襲われる。

失敗：町の特徴的な形になんともなく見覚えがある。

ネットで調べてみるか、ヴェルゼに聞けばわかるだろう。

★〈目星〉 or 〈写真の裏を見るという宣言〉

写真の裏に住所と共に「精霊の家」と書かれている。

◆HO2にのみ個別情報

ひどく懐かしい気配がする町だ。あなたはここに行きたい、と強く思う。

探索 1 日目

【二話で登場する街】



■ 探索について

左記の地図は場所の目安として用いる事。

実際のセッションではPLと共に現地の景色や店舗を検索しながら探索を進めると、ドイツ旅行気分を味わうことが出来るだろう。

また、今回の探索はローア・アム・マイン⇒ネルトリンゲンの順に訪問するように想定されている。敢えて探索箇所を提示せず、KP側からそう進言してもいいだろう。

先にローア・アム・マインの街に鏡を配達すれば、あとの余った時間は自由に使えそうだ。出発は午後になるため、配達後別の町に移動するのなら、移動先の街で夜を過ごすことになるだろう。

■ 探索可能箇所

- ・ ローア・アム・マイン
- ・ ネルトリンゲン

●ローア・アム・マイン

バイエルン州、ウィンターフランケン地方。高地シュペッサートを流れるマイン川沿いのローア・アム・マイン。美しい木組みの家が立ち並んでいる街だ。

〈知識〉

ガラス工場や製鉄所、鏡工場が盛んであり、かの「魔法の鏡」で有名な白雪姫伝説の元になったと言われる伝承の1つ、「カタリーナ姫」の住んでいた「白雪姫城」があることを知っている。

〈目星〉

数人のスーツ姿の男がこちらを見ていることに気付ける。

視線を向けると居なくなるため、追う事は出来ないだろう。

■ スーツ姿の男達

T.O.O.Gの構成員である。

■ここで出来る事

- ① 修復品(鏡)を届ける
- ② 白雪姫城を見学する

① 修理品(鏡)を届ける

依頼人の老婆の家に向かえば、すでに庭先に出てこちらを待っている様子だった。老婆はにこやかに微笑むと「お待ちしていました」と庭に備え付けられたテーブルに案内する。

椅子が丁度人数分用意されており、テーブルの上には品のある茶器が並べられていた。立ち話もなんだから、と座るよう促される。従うのであればあたたかい紅茶を振る舞ってくれるだろう。

修復した鏡を返すのであれば成功失敗問わず「まあ、綺麗。ありがとうね」と謝礼を払ってくれる。

「この鏡は私の家族が代々受け継いできた大事な品物なのです。しかしもうこの家には私一人。息子も遠くへ行ってしまいました。この子を引き継いでくれる人間は居なくなってしまうて」

「持ち主の気を狂わせる致死のガラス……。これはその複製品です。鏡と同調すると、願った異界の神や生物を垣間見ることのできる魔法の鏡…ふふ、信じて頂かなくても結構ですわ」

「ただ、これは野放しにはしてはいけないモノ。老い先短いこの身ですから、知識のあるかたのもとへ寄贈しようと思っ

「みなさんは、アノマリオール博物館ってご存知？」

〈知識〉

そんな名前の博物館は聞いたことがない、と思う。

仮に調べたとしても出てこないだろう。

首をかしげる探索者に「ふふ、少し特殊な博物館らしいの。なんでも異世界にあるのだとか。ただの噂だけれどね」とくすくす笑う老婆。

そのあとは何でもない世間話をしながら和やかな茶会は締めくくられるだろう。

帰り際に 〈目星〉

老婆の持っていた鏡が淡く光り、鏡の中に老婆の顔が反射する。

その老婆の顔には、ぽっかりと穴が空いている……ように、見えた。

② 「白雪姫城」を見学する

旧市街の北西に位置する白雪姫の原型になったとされている「カタリーナ姫」が住んでいた城。現在はシュベッサート博物館として鏡工場の歴史や陶器、製鉄など多岐にわたる展示がされていた。

その中でも目玉とされているのは「白雪姫」において登場する「喋る鏡」だ。

赤と金の装飾で縁取られた厳かな雰囲気この鏡はシュベッサート製の鏡の展示の中でも異彩を放っている。

探索者達が館内を見て回っているとヴェルゼが口を開く。

「ね、合わせ鏡って不思議でなんだか怖くなるよね」

「無限に入れ子状に続くなかで、鏡の向こう側の世界の、そのまた向うの世界の自分がこちらを見ているんだ」

「こうやって見つめていると、今いるこの世界って無限に存在する世界の1つでしかない……っておもえて怖くない？ なんてね」

〈心理学〉

なにかを言いかけて、やめたような気配がある。おそらく言及しても答えることはないだろう。

■ 千の貌

彼女はなんの気まぐれかで入り込んだニャルラトホテプである。本シナリオにおいては今後登場することはないが、どこかでまた出会うことがあるかもしれない。

■ 鏡合わせの世界

この世界が虚構の世界であることを暗に示している。

●ネルトリンゲン

直径わずか1 km程度の円形の街だ。赤い屋根の家が立ち並ぶ綺麗な景観が探索者を出迎える。周囲を囲うリース盆地の緑と屋根の赤のコントラストが美しい。

■ここで出来る事

- ① 写真の住所を訪ねる
- ② 観光

① 写真の住所を訪ねる

住所が示す場所は、路地に入り、隠れるようにぼつんと佇んでいる一軒家だった。扉にはよく見ると十字架に五芒星や複雑な文字や図形が描かれ、中央に薔薇のようなモチーフのある紋章らしきものが刻まれている。

〈歴史〉 〈オカルト〉

近代オカルト結社の原点とされている“黄金の夜明けのヘルメス教団”と呼ばれる18世紀ごろイギリスで設立された秘密結社が用いていたマークだとわかる。

薔薇十字団、カバラ、メイザーズの色の象徴に基づいた赤い薔薇と黄金の十字架である。

〈アイデア〉

かつて存在していた秘密結社をモチーフにした結社の本拠地か何かなのでは？と思う。

◆HO2のみ秘匿情報

あなたはこの場所を知っている。あなたはかつてここに来たことがある。
そんな確信めいたなにかが胸中に渦巻いた。

ノックをしてみても返事はない。中にひとの気配もなく、どうやら不在のようだ。現状は中に入ることは出来ないだろう。

② 観光

行けそうな施設は「聖ゲオルク教会」と「リースクレーター博物館」である。

○聖ゲオルク教会

後期ゴシック調の協会。この周辺で採取された石が建築に用いられたらしく、石台などをよく見ると黒い硬質な石片が混じっている。

〈地質学〉もしくは〈歴史〉

隕石の衝突時に高熱で変性したものだろうと思われる。

所謂スエバイトと呼ばれるものだ。

また、近くにはネルトリンゲンのシンボルである「ダニエル塔」がそびえている。350 の階段を登れば、かつてこの塔が陸の灯台と呼ばれた^{ゆえん}所以たる展望台に至る。その際、ここは見張り台の役割を担っていた。

現在でも見張り番が居り、入塔料を徴収する傍ら 22 時～24 時の間は昔ながらの掛け声を叫んでくれる。

〈目星〉

街のあちらこちらに不審な人影を発見する。

格好は至って普通だが、どこか統率のとれた動きが見て取れた。何かきょろきょろと見渡して探しているようだ。

○リースクレーター博物館

ネルトリンゲンは1500 万年前にシュヴァーベンジュラ山脈に落下した隕石のクレーターであるネルトリンガー・リースに作られた街だ。

それに由来し、隕石が衝突したときの様子やその後の地形変化などを分かりやすく説明している博物館である。NASA との繋がりからアポロ 16 号が持ち帰った月の石も展示されている。

入口には隕石衝突でできたこの地方の岩石などを売っているだろう。

見回っていると、なにか服を引っ張られる感覚があり、そちらを見れば大きな図鑑を片手にこちらをきらきらと見つめる子供の姿があった。

子供は嬉しそうに話しかけてくる。

■ スエバイト

隕石衝突時の衝撃で熔融急冷された岩石に、ガラスの破片などが部分的に取り込まれたものである。

「おにいさん(おねえさん)たちも隕石のおはなしすき？」

「知っている？地球の生命の起源は海の中で生命が誕生した、っていう地球起源説が有名なんだけど パンスペルミア説っていうのがあるの」

「地球の命の源が、隕石に乗ってやってきたって説なの」

「^{がほう}芽胞、っていうとっても強い種なら宇宙船とかで守られている限り、宇宙空間でも生きてられるんだって！ 大気圏突入のときも、隕石の内側で守られるから一部は生き残るんだよ」

「だから、もしかしたらこの地球のいのちって、他の星から運ばれたものかもしれないし、宇宙のどこかには地球にそっくりな星もあるかもなんだよ！すごいでしょ！」

得意げに話し終える頃には、子供の両親だろう男女が迎えに来て探索者に申し訳なさそうに礼を言ったあと子供と共に立ち去る。

〈目星〉

ヴェルゼが茫然とした様子で子供を見つめているのが見えた。

なにかを思い出そうとしているような、そんな様子が見える。

★〈図書館〉〈コンピューター〉

“パンスペルミア説”について調べることが出来る。

生命の起源が地球外にあり、流星、小惑星、彗星、宇宙塵などにより拡散したとする仮説のことだ。また、この仮説を検証するため日本の科学者により開発され 2015 年 5 月に国際宇宙ステーション (ISS)で開始された実験の中に「たんぽぽ計画」というものがあったことに目が留まる。

宇宙空間に乾燥した微生物などを散布し、生存できるかどうかを検証するものであり、宇宙へ飛び立つ生命の種をたんぽぽの種子に重ね合わせた命名らしい。

1日目 夜

二つの町を巡っているうちに日は暮れていく。

今日はホテルに泊まり一夜を過ごすことになりそうだ。

ホテルではアルバから依頼された本「呪われし者たちより」の修繕の続きと解読を行うことができる。

■本・修繕二回目

〈製作：古書修復〉〈修繕に使えるような技能〉〈DEX×5〉など

とりあえず読める程度にまでは修復することができる。

本格的なものは家に帰ってから仕上げをすることとなるだろう。

■本・解読

修繕の進捗具合により難易度が変化する。

技能は〈母国語(ドイツ語)〉で判定を行う。

- ・1回目 2 回目の修繕にどちらも成功している→そのままの値
- ・1回目 2 回目の修繕にどちらかのみ成功している→-10%
- ・どちらも成功していない→--20%

▼成功失敗に関わらず以下三つの情報を手に入れることができる。

■呪われし者たちより

【いづこか、孤独な場所 汝が決してとどまりたくない場所 いつかその虚ろな空間で 汝は道を見つけるだろう それは暗黒への道 そして我の名は暗黒】

ドイツの様々なカルトとオカルトの神話を扱っている。

本の大部分はグレート・オールド・ワンである“シアエガ”。その従者である“ナガアエ”について語られており、その神はフライハウスガルテンという小さな村にあるドゥンケルフーゲル(暗き丘)の地下に捕らわれている、と記されている。

シアエガを表したのであろうと思わしきスケッチが描かれており、それは大きな緑がかった青い目玉を持つ怪物だった。周囲には悍ましい触手が群生しており、底冷えするような恐ろしさを感じる。

■シアエガ

シアエガは丸い緑色の1つ目を持つ巨大な黒い塊である。長い触手に取り囲まれた1つの大きな目の形をとる。

現在は封印されているが、一度解放されれば際限なく膨張し殺戮の限りを尽くす。地下で解放される日を心待ちにしており、時折「人間」の姿をした化身を生み出すことがある。この化身自体は自身がかの神の化身であるという自覚はないが、無意識にシアエガの復活の手助けとなるような行動をしてしまう。

■ナガアエ

ナガアエは不快で水陸両用のヒキガエルのようにあり、シアエガの使用人である。シアエガから産み落とされた彼らは憎しみ、殺人、そして苦しみへの渴望を主人と共有する。彼らは主人に仕えて生き、災いと死を人類にもたらす。

冒流的な知識の数々を手に入れた探索者は [〈SANC 1D6/2D6〉](#)

〈クトゥルフ神話技能〉10% 獲得

〈アイデア〉

「ナガアエ」という怪物の記載から、ライン川で遭遇したものではないかと確信できる。

◆HO1に個別情報

フライハウスガルテン。

その地名にひどく心が惹かれる。ここに行きたいと強く思う。

■解読成功時の情報

いくつかの呪文が記されているが、斜め読みになるため以下の3つのみ理解することができる。呪文の習得はできない。

【ナガアエの召喚/従属】 【待てる暗黒の解放】 【神格との接触/シアエガ】

◆HO1のみ個別情報

【待てる暗黒の解放】 この呪文にあなたは目を通す。

しかし、あなたはこの呪文をすでに知っている、ような気がした。

使おうと思えば使うことが出来るだろう [〈SANC 1/1D3〉](#)

■ 3つの呪文

今シナリオではPCが自発的に使う場面はないためそれぞれの呪文の詳細に関しては割愛する。

そうこうしているうちに、夜は更けていく。

作業を一旦終え眠りにつくことだろう。

▼寝る間際まで RP などをしてもいいだろう。

夢 HO1

あなたは夢を見る。

真っ暗闇の中、何の音も聞こえない静寂の中、あなたは立っていた。

上も下も右も左もわからないのに、あなたの中には怒り、憎しみ、そんな激情が渦巻いている。理由は分からない。目についたものを片っ端から捻りつぶし殺してしまいたいようなそんな衝動が、喉元までせりあがっている。

ふと、あなたの手が何かを掴む。刹那、手に脈動するような感触が伝う。

生物のように蠢くそれはあなたにとっては不快なものでしかなかった。

いっそう強く握りしめれば、それは動かなくなった。

その何かを握っていた手の方を見やる。

そこには白目をむき、口から血と泡を吹いている金髪の青年(ハーゲン)の姿があった。あなたが握っていたのは彼の首だった。

気付いた時にはもう遅かった 首からはごきん、と嫌な音が木霊した。

そのまま彼の体は地面に落ちる。ぐしゃりと音を立てて彼……いや、今のあなたにとっては取るに足らない肉の塊が地面に赤を広げた。

足元を見やる。

そこには数多の人間の死骸が転がっていた。

テディベアを抱きかかえた少女、ぐしゃぐしゃの凶鑑を抱きしめたまま事切れた子供、庇う様に女性を覆ったまま倒れ伏している男性、あなたには彼らに見覚えがあった。

どうしてこんなことに？

否、あなたにはそんなものはどうでもよかった。

「本当に？」

あなたの背後から男の声がする。

あなたが振り向くよりも先に、あなたの目を黄金の触手のようなものが覆う。
次に体を覆われていき、身動きが取れなくなる。

たまらない不快感が体中を這うような感覚がある。だが恐怖はなかった。
心地よさと不快感、嫌悪と安堵 真逆の感情があなたの中に渦巻いている。

「忘れないで、君は君だ」
「あの子は負けなかった。だから君も。どうか」

〈アイデア〉

アルバの声だとわかる

切実な声だった。聞いたこともないような優しく慈悲深い声だった。
ショート寸前の思考回路がまるでテレビの電源を落とすようにぷつりと切れた。

〈聞き耳〉

歌が聞こえたような気がした。
子守歌だ。酷く懐かしい、泣きたくなるような優しい歌だった。

刹那、瞼を覆っていたまばゆい黄金は 穏やかなものへと変わる。
それが朝日であると気付くのに時間はかからなかった。

夢 HO2

あなたは夢を見る。

目の前には暖炉があった。あたたかい炎の光に照らされた室内の床に一人の少女がしゃがんで、画用紙に絵を描いている。

「むかしむかし、青い美しい星がありました」

「宇宙を彷徨う孤独な星は、その美しい星とお友達になりたかったのです」

「しかし、星が近づくと、その青い星の意地悪な神様が起きだして、人間たちをいじめだしたのです」

「人間のなかでとびきりやさしく勇敢な一人の青年が言いました。僕がお星さまのところへ行って、来ないようにお願いしてくるよ、と」

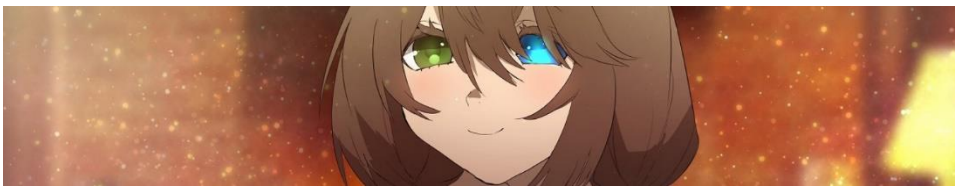
「青年は宇宙船に乗って、孤独な星の元へといきました」

「孤独な星は青年を抱きとめて、星と青年は、一緒に宇宙の旅へ出ることにしました」

「……お母さんがね、ヴェルゼと、あなたとエルダが初めて出会ったときのお話を聞かせてくれたのよ。だから、そのお話を絵本にしているの。」

彼女は淡く光る左目を押さえながら微笑む。

それは{HO1}と同じ青い義眼のように見えた。



「あら、お母さんにも見せて頂戴」

少女の近くに歩み寄る一人の女性が居た。母親なのだろう。

——それは、リンと呼ばれた少女の面影があった。左目には眼帯をしており、眼球があったのだろう部分は落ちくぼんでいる。

あなたはどうしてもだか、彼女が成長したリンなのだと確信できた。

リンは少女を抱き上げながらあなたのほうに微笑みかける。

■ スチル

探索 1 日目夜夢 HO2

「ねえ{HO2}、この子とも仲良くしてくれてありがとう」

「お前が、他の人間と違うこと、歳をとらないことを……どう思っているかはわからないけれど。あたしは、お前が……お前とエルダが、寂しくないようにしたいの」

「この子もきつといつか愛する人と結ばれて子を産んで……そして、この目とヴェルゼを受け継いでいけよう。その時は、どうか、どうか。その子とも仲良くしてね」

あなたは確信する。

これは、過去の映像なのだと。その時の自分はどう返したのだっけ？

失われた記憶の海の中に沈んでしまった夢の続きを探し求めるうちに、瞼を朝日が軽く撫でた。

ひどくなつかしく、優しい夢だった。

そんなことを考えながら、あなたの1日はまた始まった。

目覚め

▼起床後は RP や情報共有を行うことが出来る。

RP が終わった後に以下の処理を挟む。

・ ヴェルゼに「フライハウスガルテン」に行くことを伝える

ヴェルゼは少し目を見開き、何かを考えるような動作をしたのちに、

「うーん、そこ、なにしに行くの？」

「今検索してみたけどなんにもないところだよ」と嫌がる素振りを見せる。

探索者が追及するなどすれば「なんでもない」と話を切ってしまう。探索者が行くのであれば、それ以上は反対せずついて来るだろう。

〈心理学〉などを行うのであれば、何かを考えこんでいるような素振りがある。

・ フライハウスガルテンの場所を調べる

昨日読んだ本の中には大体の場所しか記されていないかった。

行くためには場所を調べる必要があるだろう。

〈図書館〉

調べてみてもそんな名前の町は見当たらなかった。少なくとも観光など開かれた場所ではないのだろうと思う

◆HO1のみ個別情報

あなたはなんとなくこの地への行き方がわかる。

具体的にはわからないが、感覚のみで到達することができると確信出来た。

▼RP などが落ち着いたら

{HO1}の携帯にアルバから電話がかかる。

眼帯の青年(ハーゲン)がいつの間にか居なくなったとのことだった。

「君達を追って行ったのかもしれないねえ。聞きたいことはあるだろうし、その時はよろしくね」との呑気な言葉の後に、電話は切れるだろう。

■嫌がるヴェルゼ

彼はおぼろげにしかこの世界に探索者達を招き入れた直前の出来事を覚えていないが、この地名に嫌悪感を覚えている。ただそれがどうしてなのかが分からずもやもやしている。

フライハウスガルテン

ドイツ西部、とのことだったため最寄りの町であるケルンに一度立ち寄ったのちに{HO1}の案内で行くこととなる。必要な物品があればここで揃えていくのが良いだろう。

暫く西に向かってバスなどを用いて進んでいけば、途中から公共交通機関の通らない区域に出る。自分の車かレンタルした車で暫く走れば、のどかな田園風景が広がり始め、次第にぽつぽつと家々が見え始めた。道は整備されておらず、村につくまでがたがたと心もとない道を進むこととなる。

村に着いたころには日も傾き、夕日が辺りを照らすところだった。

〈目星〉

村人の数人が連れ立って歩いているのを見かける。その中にエルダの姿を見る。俯き、重い足取りで歩いている。追いかけるころには見失ってしまうだろう。

◆ 〈目星〉に成功した HO2 のみ個別情報

エルダがこちらを見て少し驚いたような顔をしているのが見えた。

■ ここで出来る事

- ① 聞き込み
- ② 村の中を散策する

① 聞き込み

村の人々に聞き込みをすることが出来る。

〈交渉技能〉

話を聞いてくれそうな人を見つけることができる。

※ただし、聞き込み中に「シアエガ」「暗き丘」という単語を出した場合は「▼不穏な空気」へ

■ エルダの姿

エルダはヴェルゼの世界に引き込まれる直前、シアエガの中に眠り続けているリンと接触するためにフライハウスガルテンの祝祭(シアエガ封印の儀式)における生贄に志願していた。この世界のことも理解しており、HO1 達と手っ取り早く合流するためこの世界に引き込まれる前と同じように村の中に生贄として潜入し探索者を待っていた。

■フライハウスガルデンでの聞き込みで得られる情報

- ・最近妙な連中が村にやってきたのを見た。何か村長と話をしているのは見かけたが何をしに来たのか分からない。
- ・今日の夜に村で数年に一回の祭りがある。村で信仰されている神を讃える祭りである。
- ・祭りの最後には、村の人間でも一部しか知らない場所で神聖な儀式を行う。
- ・この村にあまり外から人が来ることはないが、祭りの日には若い娘が村の外から招かれる。

② 村の中を散策する

行けそうな施設、場所は「図書館」「広場」の2つ。

○図書館

村の中にある小さな図書館だ。村ではあまり利用されていないのだろう、司書と思わしき人間は居眠りしている。

一般的に流通しているものよりも数年ほど遅れたものが揃えられている。

〈図書館〉

「フライハウスガルテンの歴史」「大きな一つ目の怪物が描かれた絵本」を見つけることができた。

■フライハウスガルテンの歴史

この村の興りなどをまとめたもののようだ。

歴史そのものは一般的な村とあまり大差ないものの、数年に一度村で崇められている神を讃える祭りがあることや、昔は村の若い娘が生贄として捧げられていたことなどカルトじみた内容が書かれている。

この村で信仰されているのは「シアエガ」と呼ばれる神であり、かつては村にシアエガを信仰する小さなカルト教団があったがすでに滅んでしまったようだ。

★ 〈目星〉

経年劣化だろうか、不自然に読めない箇所がいくつかあった。

文脈から恐らく人名や何かしらの固有名詞であることがわかる。稀に一文節が丸ごと消えているものもあるだろう。

〈アイデア〉

まるで歴史から消されてしまったようだと感じる

■ 妙な連中

T.O.T.Gの構成員である。

■ 生贄

本来であれば村の若い娘を生ける祭壇(生贄)として捧げていたが、現代になってからは(少なくともここ数十年は)外から身寄りのない若い娘を用いて儀式を行うようになったためである。なお、エルダが生贄として起用されたのは単純に村の人間が彼を女と思い込んでいるため(実際両性具有なのだが)。

■ 目星情報

エンディング分岐のヒントになるため、失敗した場合も別技能での振り直しなどで積極的に提示すること。

■大きな一つ目の怪物が描かれた絵本

子供向けにはは禍々しい絵柄で描かれた絵本だ。要約すると、
「むかしむかし、大きな緑色の目をしたわるい神様が居ました。神様は人間にいじわるをするので、地面のそのまたずうっと奥の暗闇にとじこめられていました。神様は外に出たくて仕方ありません。なので、自分の体をいくつも小さく分けて、外にこっそり放り出しました」

「神様の小さな分身は人間にまぎれて、神様が外へ出るお手伝いをします。分身の手を借りてついに外へ出た神様は、どんどんと体を大きくしていきます」

「その体が地球よりも大きくなるころ、地球の外にいる別の強い神様が“おい、どうして俺様の許可なしに、俺の住処に入り込んでいるんだ？”と怒りました。怖くなった一つ目の神様は他の神様に助けを乞いました。そうすると、心の善い神様が降りて来てこう言いました。“これに懲りたらもう悪さなんかするんじゃないぞ”と」

「そうして、心の善い神様は時間を巻き戻して、全てをなかったことにしました。それでも、一つ目の神様が残した破壊の爪痕は少しずつ世界に残ってしまったのです。壁に残った大きな獣がつけたような爪痕や、地面の穴ぼこは、もしかしたらこの神様の仕業なのかもしれません。」といった内容だ。

■ 不自然な痕跡

シアエガの復活がある度に旧き神による時間の巻き戻しが行われるが、実際完全に何もかもを元通りにできるわけではなく、修正によって存在を消された人物などがこのような不完全な形で痕跡を残している。絵本はこの巻き戻りの示唆となる。

また、絵本も含めシアエガの初出であるエピソード“我が名は暗黒”のオマージュである。

○広場

日中は村人の憩いの場となっているのだろう。今は何か祭り用なのか鮮やかな装飾が施されている。

〈目星〉

村のところどころに謎の傷がある。

建造物や木々の幹などに大きな獣にでも挟られたような爪痕のようなもの、大型の自動車がぶつかってできたような崩壊した痕があるのだ。

〈聞き耳〉

村人たちの噂が聞こえる。

「生ける祭壇……これで今年も……」「無事に終わるといいんだけど」「でもあいつら……よそものの集団が……」といった言葉が途切れ途切れに聞こえる。

※話しかけたとしても部外秘情報なため応じてくれない。もしも「シアエガ」「暗き丘」という単語を出した場合は「▼不穏な空気」へ

〈アイデア〉

どこからか見られているような気配がある。

▼不穏な空気

※発生条件：村の人間に「シアエガ」「暗き丘」について聞く

探索者が「シアエガ」「暗き丘」の名前を口にした途端、周囲の空気が一変する。今の時間帯、人気は少ないと思っていたが、あなたに一齐に視線が集まる。

いくつもの目があなたがたを見つめている。まるで時を止めたかのような静寂が訪れた。〈SANC 1/1D3〉

これ以降、村人から話を聞くことが出来なくなる。

▼招かれざる客

※発生条件：探索箇所を全て回る

すでに周囲は暗くなり、宿を探さなくてはならないかと考え始める頃。

探索者の前方から数名の村人が歩いてくる。その先頭には白髪の老人が居り、どこか剣呑な雰囲気を感じさせた。

探索者の目の前に足を止めると「旅人よ 悪いことは言わない」「今すぐここを立ち去りなさい」「そして二度とこの地へは足を踏み入れないように」と、穏やかだが、どこか刺々しい口調で語り掛ける。

探索者が応じてその場を離れるまで村人たちに囲まれることとなる。

◆HO1のみ個別情報

なぜか胸騒ぎがする。このままだとよくないことが起こるような予感がある。

■村人の警戒

村の人間にとってシアエガは封印すべき神であり、この神の解放のために部外者が来ることを恐れ、探索者を警戒している。このデメリットが出たとしてもそもそもこの村で手に入れることができる情報は殆どない。店などの施設は店員が素っ気なくなる以外は通常通り使用できる。

■HO1の予感

シアエガの封印の更新がなされるため、HO1の中に流れる血が「嫌な予感」として感じ取っている。食い下がる探索者もいるかもしれないが、ここは引くしかないことを PL にやんわり伝えよう。

▼エルダとの再会

その場を離れ、これからどうしようか、と困惑している時。背後に自分達を追ってくる気配を感じた。振り返ればそこにはエルダの姿があった。

こちらに走り寄ってきたかと思えば、{HO1}と{HO2}を見るなり二人を抱きしめてくる。暫くきつく抱きしめ「やっと見つけた……{HO1}、{HO2}……！」とそれぞれの顔や頭をぺたぺたと触りだすだろう。

赤色の瞳はうるんでどこか泣きそうな顔をしている。



「あの時は君達とは話せなかった。でも今はやっとうこうやって触れ合うこともできる。ああ{HO1}、本当にリンとそっくりになって……。{HO2}、君は……君はやっぱり変わっていないね」

「どこから話せばいいかわからない。だけど、とにかく今はここに来ちゃだめだ」

「前回の巻き戻りのことを覚えている？とは言っても、今回はおそらくあいつの仕業じゃない……ここは多分ドリームランドに似た異世界だ。どういう原理かは分からないがぼくたちはあの時にここに転送された。ここが現実を模した場所なのであれば、君たちがここに来ることで同じことが起こってしまうはずだ」

「だから一……」

エルダは一方的に何かを話し続けている・その内容はあなたがたにとっては意味不明なものだった。今もなおエルダは何かを伝えようと口を動かしている。

だが、貴方達には聞こえなかった。前に青年と出会った時もこんなことが起こったような、と思い出していた、その時。

大きな爆発音と怒号、悲鳴が。まるで何もかも音をかき消さんとばかりに轟いた。

エルダはそちらを見やると 切羽詰まった様子で「まずい…！」と舌打ちをしながら先に駆けだしてしまう。

■ スチル

エルダとの再会(フライハウスガ
ルテン)

■ 不気味な現象 02

エルダが話した情報はこの世界にとって不都合であるため、ヴェルゼが無意識にミュートした。

▼異変

村に戻るとそこは火の海と化していた。

村の人々は逃げまどい、悲鳴と怒号が渦巻いている。

火の手から逃げ出し、探索者の姿を視認した者が助けを求めようとしたのか、こちらに手を伸ばしてくる。しかしその手が届くことはなかった。

ぐしゃり 目の前でそれは音を立てて崩れ落ちた。

村人の背後に居たのはあの蛙の化け物……ナガアエと、そして複数の黒ずくめの男だった。

「プロビデンス そしてネメシス 見つけたぞ」

「今こそ神々の黄昏をこの地より始めるのだ」

黒ずくめの男たちは口々に何かを唱えながら探索者の元へとにじり寄ってくる。こちらを捕らえるつもりのようなのだ。

ふと周囲を見やると、気を失ったエルダを担ぎ上げた黒ずくめの男たちがどこかの方角に走り去っていくのが見えた。追いかけるには目の前の敵を片付ける必要があるだろう。

◆HO1のみ個別情報

黒ずくめの人間達、あれは自分をつけ狙う T.O.G の人間だとなんとなく分かる。

◆HO2のみ個別情報

あなたはこの風景を見たことがある。エルダが連れ去られ、どこかへと行ってしまふ光景を。

それがいつだったか、どんな状況だったのかを思いだすことができないが。

▼ナガアエ&T.O.G 構成員戦

ナガアエ 1 体と構成員 2 体との戦闘となる。以下は戦闘に関する KP 情報。

この戦闘で力尽きた場合は【※留意点】を参考し描写・処理すること。

△ナガアエ ステータス (マレウス・モンストロルム P85 参照)

STR : 26 CON : 24 SIZ : 22 DEX : 7 耐久力 : 23 DB : 2D6 装甲 : 2

〈かぎ爪(4回連撃)〉 60% ダメージ : 3D6 (1D6+DB)

〈噛みつき〉 40% ダメージ : 1D8+2D6 (今回 P O T はなし)

△構成員 ステータス

STR : 15 CON : 10 SIZ : 15 DEX : 10 耐久力 : 11 DB : 1D4

〈拳銃〉 60% ダメージ 1D8 1R に 3 回攻撃

└ 装弾数 17 (残弾が無くなり次第 1R かけてリロードを行う)

〈回避〉 20%

△ 勝利条件 敵の殲滅

△ 敗北条件 なし

※前提

本シナリオ内の戦闘は作者卓の以下ハウスルールを元に設定している。

- ・ 1 R 中に複数回攻撃が命中した場合は、マイナス補正なしで何回でも〈回避〉〈受け流し〉のロールが可能。
- ・ ただし 1 つの攻撃に対して行えるロールは〈回避〉〈受け流し〉のどちらかを 1 回のみ。

例：敵が 4 回攻撃を行い、3 回成功した場合

1 回目の攻撃：回避 / 2 回目の攻撃：受け流し / 3 回目の攻撃：回避

という風に技能ロールを行うことが出来る。

以上を踏まえ、KP のハウスルールに合わせて敵のステータスを調整するか、
今回のみこのルールを適用するのが望ましい。

▼戦闘終了～暗き丘へ

戦闘終了後、エルダの連れて行かれた方向を追いかけることができる。

炎はより勢いを増していき、風に煽られた火の粉が踊るように宙を舞う。

村人たちは炎に焼かれていた……ではなかった。見るだけでも数十匹のナガアエが辺りを取り囲んで生き延びた村人に襲い掛かっている。

そんな惨状の広がる村を抜ければ開けた場所に出た。丘のような場所だった。

少し小高くなったところに、エルダを抱えた黒ずくめの連中がいるのが見える。

彼らの視線の先には1つの奇妙な非対称の建造物のシルエットが、奇妙に緑がかった月を背後にそびえていた。

それは1つの非常に突出した側面を持つピラミッドのように見えた。ピラミッド型の構造物の入り口に向かって7つのオベリスクが並んでおり、内部が見えるように一部が開いている。

その最奥には石の祭壇を備えた長いホールが設置されている。

周囲には12センチ程度のハゲタカめいた石像が計5つ設置されており、それぞれ規則正しく祭壇を囲うように鎮座していた……が、現在はそのうちのいくつかが破壊されているようだった。

◆HO1のみ個別情報

夢で見た光景に似ている、と思う。

〈聞き耳〉

丘の上から何か呪文めいたなにかが聞こえる

そちらへ向かおうとしたその刹那、丘の上から突風が吹き抜ける。

◆HO1のみ個別情報

あなたは無意識に口を動かしていた。それは未知の言語だった。

しかしあなたはそれらをさも当たり前のように、まるで普段から口にしているかの流暢さで口遊ぶ。それは、丘の周囲に反響する呪文と同じ響きだった。

直感的に理解できるだろう。この呪文は「待てる暗黒の解放」なのだと。

かと思えば、黒々とした瘴気のようなものが辺りを包み込む。

天上に輝く月さえ覆い隠し辺りは暗闇に包まれた。

全ての光が吸収されるような暗澹たる空間の中、頭上に緑色の月が灯る。

否、それは月などではなかった。大きな、巨大な一つの目だった。

それが今、自分達を嘲笑うがごとく天上から見下ろしている。

その目の周りで空が二つに分かれる。深い裂け目ができ、その間から更に黒々とした暗黒がしみだしていく。夜よりも暗き黒、それがねばねばとした触手の塊となって這い降りる。それは黒い空を背にして降臨した、絶望そのものだった。

とこしえ
永久の闇より深き闇 主は来る。

グレート・オールド・ワン シアエガを見た探索者は [〈SANC 1D10/1D100〉](#)

圧倒的存在の前でなすすべもない矮小な存在は、ただただ目の前の惨状を受け入れるか、受け入れきれず壊れるしかなかった。ヴェルゼもまた同様に目の前の光景を信じられないといった様子で茫然としている。

かの神は触手をあたりにあてずっぽうに伸ばし次々となぎ倒しへし折り蹂躪していった。人間も木々も何もかもが平等に弄ばれ残骸となっていく。

エルダの姿を探すかもしれない。彼女の銀色の髪はこの暗黒の世界のなかに在ってさえ美しく輝いていた。今は触手の中に包み込まれているが、神はそれを一瞥するとすぐに興味をなくしたかのように握りつぶして地面に投げ捨てた。

肉塊となったエルダが赤いしずくとなって地面を濡らしていく。

何もかもがここでは平等だった。

死が等しく誰しにも訪れるものなのであれば、あの神は死そのものなのだろう。

眼前の光景になすすべもないままでいると 唐突にその光景は何者かによって遮られる。

誰かに抱きすくめられたのだと、確信できるだろう。

確認するのであればそれはハーゲンだった。

彼は肩で息をしながらキッとヴェルゼのほうを見やった。

右目の眼帯は外れており、そこには暗黒色の球体がはめ込まれている。今はぼんやりと光っているように見えた。

「良かった、まだ融合は済んでいない」

「アレがお前達を取り込んでしまったら最後だ、お前達だけでも逃げろ 早く！」

ハーゲンの叫びにも似た声が木霊する。

その刹那、触手の内の一本がこちらに向かって伸ばされているのが見えた。

その場の誰もが「最悪」を想像した。その時だった。

周囲の光景が唐突にまるで時間を止めたかのように停止した。

荒れ狂う木々のざわめきも悍ましい神の手すら。

ジジ、ジジジジと次第にノイズが走るように周囲の景色が揺れ始める。

揺れてぶれて、裂けて割れて、そしてパズルを崩したかのように景色は次々瓦解していった。まるで舞台のハリボテのように周囲のあらゆるものが崩れ去っていく。

それは探索者たちも例外ではなかった。まるで世界に溶けてしまうような錯覚を覚える。何かが書き換わっていくような、分解されていくような。

体は少しずつ砂のように灰のように崩れていく。良く見ればそれらは全て「0」と「1」で構成された数字の集合体だった。

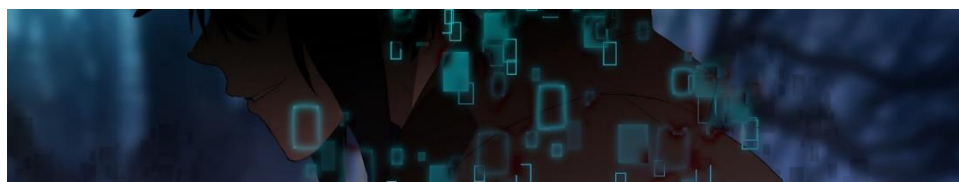
抗えない崩壊の最中、唐突に足元にぽっかりと大穴が空き

どぼん

探索者達はそのままその大穴の中へと落ちていく。

落下し沈んでいく最中、あなたたちの目は傍にあったヴェルゼの姿を捉えた。

同じような崩壊をたたえていた彼の口元は、たしかに 笑っていた。



■ スチル

世界の崩落

夢 共通

水底のような穏やかな暗闇が広がっていた。

寄せては引いていく波に翻弄されながら探索者の体は下へ下へと沈んでいく。

もはや瞼を開けることすら億劫になるころ、ヴェルゼの声が響いた。

「そうか、そうだ やっと思い出した」

「大丈夫」

「大丈夫だよ{HO1}、{HO2}、エルダ」

「今度こそもう誰も犠牲にならなくていい世界を僕が作るから」

「だからもうお休み」

◆HO1のみ 〈アイデア〉

あなたは確信する。この世界はあなたの知る現実世界ではないことを。

ヴェルゼが実体化しているのも、先ほどまでの非現実的な世界の崩壊も、それらすべてがこの予感を裏付けた。しかし、この世界に入る前後の記憶はない。

ただ、もしかしたら最近見る夢と何か関係があるのではないか、と白んでいく意識の中で思った。

瞼を焼くような閃光が轟いた。

ばちんとなにかが弾けるような音がして、はずみであなたがたは目を見開く。

沈みゆく先に、大きな海溝のような裂け目が見えた。

その裂け目は大きく口を開く様に割り開かれ、そこにあったのは、巨大な青い目だった。

目が、合う。

一度まばたきをする間に、巨大な目は消えていた。

代わりにあったのは見知らぬ、真っ白な空間だった。

▼記憶(プロビデンス内の記憶領域)

巨大な立方体状の真っ白な部屋のなかに貴方達は佇んでいた。

この部屋にいる人間は探索者二人のみ。部屋を見回すと壁一面が本棚で覆われており、中央にはホログラムで投影されたかのような青い球体が浮かんでいた。

その他には何もなく、出入口も見当たらなかった。

■探索可能箇所

- ・ 本棚
- ・ 床
- ・ 青い球体

○本棚

〈目星〉

どんな本があるのかを一通り見て回ることができる。

本は全て真っ白な背表紙だったが、うっすらと文字が書かれていた。

そこに書かれていたのは人名や動植物の固有名詞、まるで地球上のあらゆる生命の記録であるかのようにこの巨大な本棚に収まっている。本を開いてみるのであれば、ページの上にホログラムのように映像が投影される。ワイヤフレームで表された人間あるいは動植物の構造図が表示されており、まるで遺伝子や細胞の地図、あるいは生命そのもののカタログのようだ、と思うだろう。

〈図書館〉

「プロビデンス開発計画書」「コード：ダンデリオン概要」と書かれた本を見つけることができる。これらの本のみ黒い装丁だった。

これらはどちらも見たことのない言語で書かれている。

〈知識〉

少なくとも地球上には存在しない言語であると確信できる。

◆HO1のみ個別情報

あなたはなぜかこれを読むことができる。

プロビデンスが自動的に翻訳してくれているようだ。

■生命カタログ

プロビデンスが学習し記憶した生命や無機物のデータである。

■プロビデンス開発計画書

生命の箱舟、我々「母なる青き星」の人類の文明そのものの保存を目的に、この「神の目」の開発を行う。

この目は生物や無機物そのものの遺伝子構造や組成を分析・解析し記憶、保存するだけでなく「編集」することもできる。

つまりあらゆる存在を意のままに「再定義」できるのだ。我々はこの「神の目」の完成によってより高次の存在へと昇り詰めることができる。

この掌に収まる球体1つにこの星の全てを詰め込むこと、それは即ち、我々は1つの惑星が持つものと同等の情報を掌握することができるということだ。

いつかこの宇宙の全てを理解し、この神の目と同じく我々の手の内にそのすべてを収める未来も近いだろう。

神々がそうするように、我々はいつか1つの宇宙の支配者となるのだ。

〈アイデア〉

内容等から、これは地球の外にある文明のものなのでは？と考えられる。

地球の他に人類のような知的生命体が、それも地球のそれよりもはるかに高度な文明を持つ存在がいるというのだろうか **〈SANC 1/1D3〉**

■コード：ダンデリオン概要

母なる青き星に突如襲来した“意思を持つ彗星”

それが発生させる特殊な“歌”によって我々の星に原生していた邪なる神々の系譜が目覚めを迎えた。我々の文明をもってしてもそれらの侵攻を止めることは叶わない。もはや人類の滅亡は目の前まで迫っている。

そこで我々は生存者の避難と同時進行で「コード：ダンデリオン」を計画、実行に移す事とした。かの彗星にプロビデンスを装着した人間を搭載した対彗星ミサイルを撃ち込み、内部から少しずつ「生命の種子」に変換することで他の星に散布させ、いつか生き残った人類が脱出し住むための惑星を作るという計画だ。つまり彗星を用いた人為的パンスペルミアである。我々は自分達を死に追いやった彗星に希望を託したのだ。

搭乗員にはプロビデンス開発チーム所属の「ヴェルゼ・ライカ」氏が自ら名乗り出た。生存した人類は既に宇宙へと避難した。

いつか人類が生存できる惑星に辿り着くことを、あの彗星が運んだ命の種が芽吹くことを信じて……。

◆HO2 に個別情報

この「意思を持つ彗星」は自分とエルダのことだと確信する。

自分達は元々「グロース」と呼ばれる神の一柱だった。

だがあるとき、その神の体から剥がれ落ちたひとかけらが長い宇宙空間の旅の途中で自我を持ち、グロースの幼体として独立し、ここに書かれている地球に酷似した星に接近したのだと思い出す。その際、体に撃ち込まれたミサイルにヴェルゼという青年が乗っていたこと。彼に歌を聞かせるために人間の形を模倣したこと。そして最終的に現在の地球に落下したことも。

だが、そのあとのことはまだよく思い出すことはできない。

宇宙の真理の一端を思い出す。〈クトゥルフ神話技能〉10%獲得

○床

床一面に真っ白な綿毛のような植物が生えている。たんぽぽだ、と分かるだろう。よくよくみればたんぽぽが生えた床は一面ガラス張りようになっており、隙間から床の下を覗くことができる。

そこにあったのは、ガラスケースの中に横たわる幾億人もの全裸の人間達だった。皆一様に眠っているようだ。

床の下には彼らの入ったガラスケースが無限に積み上げられており、まるで透明な棺の死体安置所か、人形の展示室のようだと感じた。

■ ガラスケースの人類

ヴェルゼが「夢引き」によって集めた人間の魂たちである。彼らの記憶をもとに「疑似ドリームランド」を形成している。

〈目星〉

今まで出会ったことのある人間も見つけることが出来る。

彼らはどうしてここにいるのだろう。

○青い球体

ふよふよと部屋の中央に浮かぶそれは、絶えず周囲に何かの映像をポップアップのように表示しながら回転を続けている。

映像の中には人々の暮らしや何気ない日常が映されており、まるで世界中の監視カメラの映像が映し出されているような感覚を覚えた。

〈アイデア〉

この球体は地球を模しているのではないか？と感じる。

◆HO1のみ個別情報

この球体を見たとき、あなたの脳裏に膨大なそして複雑な数式が流れ込んでくる。到底人間には理解のしきれぬもの、そしてこれが世界の何もかもを理解し表した数式なのだと理解する。人間が到達できぬ、してはならない領域のものだ。

〈SANC 1/1D5〉

暫く球体を見つめていれば、映し出されていた映像は唐突にぷつんと途切れる。

そして頭上にひときわ大きなポップアップが表示され、何かの映像が流れ始める。そこに映っていたのは、先ほどの神の降臨のシーンのように思えた。

視点的に、{HO1}の視点なのだろう。

〈アイデア〉

先ほどの降臨のシーンに酷似しているが、何かが決定的に違うように感じる。

例えば映画のシーンを撮りなおした、ひどく酷似しているものの全く別の時間に撮られたもののような……。

あのおぞましい神の青みがかった緑の目がこちらを見る。

その目はどこまでも淀み、そして怒りに燃えているように感じられた。

触手がこちらに伸ばされる。それは{HO1}の体を徐々にぐるぐると囲み、そしてついに視界はその神の触手と同じ暗闇に覆われた。

暗闇は胎動していた。そのなかで、なぜか映像を見ているだけなのに体が徐々に溶かされ、そしてじわじわとその暗闇に混ざるような感覚を覚える。

そんななか、突如映像にぷつり、ぷつりと何かの音声が混ざり始める。

それはヴェルゼの声だった。

「{HO1}。ああ、だめだ、このままじゃ」

「神様と一緒にあってはいけない、お願い、」

「僕では君を救えない、この世界を守れない」

「それなら、それならせめて魂だけでも、救いの地へ。みんな、みんなおやすみ。その間は僕が引き受ける。この神様をなんとか留めるから。」

「おやすみ、」

その瞬間、{HO1}の視界は白んでいく。

もはや瞼を開けているのか閉じているのかすらわからない暗闇の中、真っ白な空間に意識が落ちていく。その空間には何もなかった。

何もなかった空間、その頭上が徐々に青みがかっていく。……空だ。

下を見る。木々や土、そして街。最後に人々が現れる。

ミニチュアの箱庭のようにそれらは現実を模倣し構築されていく。

0 と 1 で出来た塵が世界を構築していく。

あなたがたは理解する。

この 5 分前に作られたような世界こそが、先ほどまでいた世界なのだと。

現実を模倣した夢なのだと。〈SANC1/1D5〉

……映像は終わる。

もはや何が現実なのか夢なのかわからなかった。

あの神の降臨が現実に起きたことなのだとすれば、夢の中でも同じことが起こったことになる。そして現実世界は今一体どうなっているのだろうか？ と思うかもしれない。だがそれらを判断できる要素は、今はなにもなかった。

視線を戻す。目の前には 4 つのガラスの棺がいつの間にか現れている。

中には安らかな表情で眠るエルダ、ハーゲン、{HO1}、{HO2}の姿があった。

〈アイデア〉

先ほど見た棺の中の人間たちと同じだと感じる。

もし自分たちの意識だけがこの世界にやってきているのであれば、他の人間たちも何らかの要因でこちらにやってきているのでは、と感じる。

部屋の中を見渡していると、目の前にポップアップが表示される。

【疑似ドリームランド 基礎構築完了】

【オブジェクト：夢見る人 との接続……完了】

【プロトコル“夢引き”：更新待機中……更新失敗 バックグラウンドタスクに移行】

【強制終了によるエラーを多数検出 問題を解決しますか？】

【システムスキャン……】

【記憶領域の承認していない閲覧を確認 外部からのコネクトをシャットアウトします】

【現在処理中……】

刹那、プツンと意識が途切れる。

まるでテレビの電源を落としたかのように、目の前が暗くなる。

意識が途切れる間際、崩れ落ちる体を誰かが抱きとめてくれたような気がした。

「おやすみ、」

「次はきっともう何も悲しい事のない世界で」

誰かの声が聞こえたのを最後に、無音の暗闇へとあなたがたは落ちて行った。

夢 HO1

ふわふわとあなたの顔を何かが撫でる。

薄く目を開ければそれは花卉だった。視界いっぱいの花が咲いている。あなたは花に埋もれて横になっていた。

「目が覚めたかい 私のかわいい{HO1}」

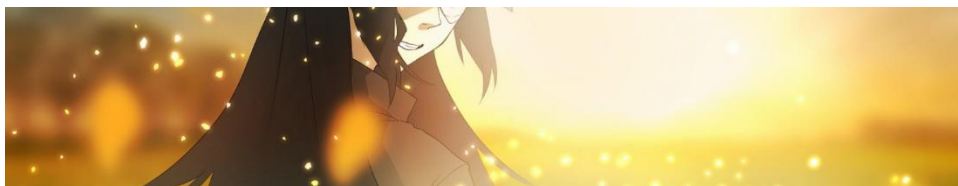
「とはいってもここは夢のなかの夢。この時間もまぼろし。まやかし」

体を起こせば、一面の花畑に佇む少女がそこにいた。

あなたにとってもよく似た面影を持つ彼女は微笑みながらあなたに近づいてくる。

〈アイデア〉

前に見た映像の中の、エルダと HO2 と共にいた少女だとわかる。



「私がお前と会ったのは、お前がおかあさんのお腹にいるときだったね」

「だから会うのは初めてだ。はじめまして、おばあちゃんの リンよ」

「よく大きくなったね」

優しい声音だった。あなたの祖母だという彼女は、あなたが生まれて初めて感じた血の繋がりは、やはり夢だからなのか、それとも老婆にはとても見えないその外見からか現実感がないように感じた。

何かを喋ろうとするかもしれない、しかし声は出ず、体もまともに動かせない。

ただただ心地よい微睡が体を覆っている。

※ただし、探索者がリンと話をしたい場合は、少しの間なら話すこともできるだろう。恨み言を言うとしても、感謝をするとしても、リンは否定せず全て受け入れてくれる。ただただ、HO1が大事であること。産まれてきてくれて嬉しかったこと。一番つらい時に傍に居られなかったことだけが心残りであることなどを話してくれるかもしれない。

■ スチル

リンとの邂逅(HO1 夢)

暫くすればリンは立ち上がり あなたに背を向ける。

「さあ、もうすぐ目覚めの時間だ」

「これからお前は過酷な現実に向き合わなきゃいけない」

「一緒に戦ってやれないけれど 忘れるな、あたしはいつでもお前の傍に居る」

「{HO2}によろしく言うておいて。それから……エルダとヴェルゼに、馬鹿なことをするんじゃないよって伝えて」

「頼んだよ」

リンの体は瞬きのうちに花卉となって空を舞う。

あなたの体を一瞬撫でたあと、風に乗ってどこかへ行ってしまった。

その花びらのうちの一枚が、あなたの左目の瞼の上にひらりと落ちる。

そしてまるで砂糖菓子が碎けるようにして粉々になり、雪のように溶ける。

瞬間、あなたの中に何かが流れ込むような感覚を得る。

それは何かのプログラムコードのようだった。

それが何のためのものなのか、今のあなたにはわからなかった。

ただ直感的に、彼女があなたに託したもののだと理解できる。

◆HO1 への秘匿情報

【取得：「???」 判定：〈任意の芸術技能〉 効果：??】

穏やかな時間は過ぎ、景色はどんどんと白んでいく。

目覚めの時間だ、となんとなく察しながら、あなたは夢の中の夢から醒めて、偽りの現実へと覚醒を急いだ。

夢 HO2

あなたは夢を見る。

また、あの暖炉の前にあなたは腰掛けていた。視線を横にずらせば隣には、お腹の大きな妊婦の女性が座っている。

あなたはすぐにそれが、前回の夢で見た少女の成長した姿だとわかる。

「{HO1}、はやく生まれておいで」

「ねえ{HO2}、あなたもこの子にお喋りしてあげて頂戴な」



■ スチル

ノルンの夢(HO2 夢)

彼女はやわらかく微笑む。

そのすぐ隣には寄り添うように老婆とエルダ、少女だった女性の夫なのだろう男性が居た。あなたにはこの老婆がリンということもすぐにわかった。

{HO1}はリンの孫だった。あなたとエルダは彼女らの友人だった。

あなたたちはずっと昔に、もう出会っていた。かけがえのない家族だったのだと、今は思い出すことが出来る。

そうなるまでの記憶があやふやではあるが、彼女らとの日々が暖かいものだったと、それだけはありありと思い出すことができた。

その時のあなたはこの日々が永遠に続くと思っていた。

ばたん、扉が大きな音を立てて開け放たれる。

ほぼ同時に黒づくめの人間たちが部屋に押し入り、リン達を捕らえる。

エルダは必死に抵抗し彼女らを守ろうとするが、捕らえられどこかに連れ去ろうとしていた。娘の夫は、身重の彼女を庇おうとして殺された。

リンはその間も「{HO2}！その子と一緒に逃げるんだ！」とこちらに叫び続けていた。

あなたはとっさに、腹の大きく膨れた娘の手を取って逃げ出した。

必死に走って走って、身を隠しながらの逃亡だった。

リンやエルダのことは心配だったが、それでもあなたはこの娘とその腹の中に居る{HO1}を助けなければならなかった。

悲しかったのかもしれない、つらかったのかもしれない。

それでも身を奮い立たせて、長い長い間あなたと娘はあの忌まわしいもの達から逃げ続けていた。

やがて黒々とした木々に覆われた森に辿り着いた頃には追手の攻撃によってお互いに負傷しぼろぼろだった。

もはや体力は限界を迎えて、今にも崩れ落ちそうな足に鞭打ってそれでも走り続けた。

……そこで、夢は途切れた。

意識が覚醒に向かうなか、あなたは、歌を耳にする。

子守歌のようだった。

優しくも悲しい母の歌だ。

◆HO2 への秘匿情報

【取得：「???の子守歌」 判定：〈芸術：歌唱〉 効果：??】

〈アイデア〉

エルダの声だ、と確信する。

あなたが目覚めるまで永遠に歌は繰り返される。

歌が小鳥のさえずりに代わるころ、あなたは目を覚ますのだった。

△生還報酬

- ・ SAN 値回復〈2D10〉
- ・ 修復・修繕に成功した品目×5 の自由技能成長ポイント

— 第二話「爛壞」 完 —